

\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



## 「浜通り・中通いを…元通りに!!」

2013年3月23日、福島市あづま総合体育館は、収容能力をはるかに上回る参加者で埋め尽くされた。



＜原発のない福島を！ 県民大集会＞

◆人間らしく生きていくためには、人権・平和・環境の保証が不可欠。国と東電は、いまだに心から謝罪することなく、うそと隠蔽を重ねて早期の風化を図ろうとしている。福島の浜通り・中通り 元通り！（曹洞宗・円通寺住職／吉岡棟憲さん） ◆福島県民の願いは、福島原発の全基廃炉だ。私達には、放射能の不安のない未来を作る責任と義務がある。（実行委員長／五十嵐史郎さん） ◆避難する/しない、そして今度は、故郷に戻る/戻らない…。人々の心が引き裂かれている。首都圏の人々が「原発の電気を使いたくない」と言えば、福島原発はなくなる。原発はもうごめんだ。（福島大教授／清水修二さん） ◆孫から、「ひどい事をした」といって馬鹿にされるのか、「いい事をした」といって誉められるのか。もう過ちは繰り返したくない。再稼働は絶対に認めない。（ルポライター／鎌田慧さん） ◆復興々々と言われているが、真の復興とは「原発をゼロにする」と決めることから始まる。（JAふたば代表理事専務／篠田弘さん） ◆最も怖いのは、福島が忘れられ、また同じような事故が起きること。異常な環境に慣れてしまうことのないように、事実の発信に努めていきたい。（高校生平和大使・南相馬市小高区／高野桜さん） ◆人は変わることができる。社会も変えることができる。私達一人ひとりが作ってきたこの国を、私達なら変えることができる。（県森林組合連合会／鈴木邦彦さん）

※福島県民の心の叫びと決意に、耳を傾けて欲しい。

私達「救援・中部」は、チェルノブイリ支援で学んだ経験・知見を生かし、福島復興・再生に全力を尽くす決意である。事故から、まだわずか2年。しかし、事故の早期終息を目論む国や市町村の助成金は、復興の掛け声とともに「風化」していく。読者の皆さんの支援を、切にお願いしたい。（神野 英樹）

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

### NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援中部

## ☆原発なくそう・3・11キャンドルアクション☆

東日本大震災・東電福島第一原発の事故から2年目の3月11日夕方から、「未来につなげる・東海ネット」の呼びかけで、名古屋・栄噴水前で「原発なくそう・3・11キャンドルアクション」が行われた。竹筒やビンの中のキャンドルに火が灯され、震災・原発事故で犠牲になられた方々へ静かな祈りを捧げているかのようであった。



集会では、原発事故による放射能被害を避け、愛知県に避難しておられる方のメッセージが伝えられた。関東から母子で避難されてきた方は、「疎開して、放射能の影響のないところで身体を休めたかった。無知ゆえに、子ども達を被曝させてしまったが、どれくらい被曝しているのか？ 今後どうすればよいのか？ 子ども達を、まだ見ぬ孫達を守りたい…。」と、子ども達への強い思いを伝えていた。また、福島県伊達市から名古屋市へ避難されてきた方は、「事故後4日目に4人の子どもと避難し、3ヵ月後に夫も仕事を辞め避難した。慣れない環境での生活、子育ては大変だったが、今は5人目の子どもも生まれた。同じ境遇のお母さん達とも繋がっている。周囲に避難してきている人はいるが、その事を言えないかもしれない。是非、声をかけてあげて欲しい」と、熱く語られた。また、この日、ウクライナから帰国したばかりの竹内さんもスピーチを行った。「福島事故の様々な立場の被災者（現場の作業者・避難者・汚染地域の住民・他地域で食品の汚染を憂慮している母親など）について、ばらばらに報道されているようだが、その全体を把握し、それぞれに必要な保障や医療を提供するような、総合的な対応のできる日本全体としてのシステムが必要だと思う。それが、ウクライナのチェルノブイリ被災者と18年間おつきあいをさせていただいた感想。」

その後、中電本社前までキャンドルデモ。「原発から撤退し、新しいエネルギー開発の先駆けとなれ！」等のアピールを届け、その夜の行動を終えた。 (山盛)

\* \* \* \* \*

不思議なことですが、私が原子力の安全の問題に興味を持ったのは、私の夫と、福島原発事故のずっと前に活動を始めた「チェルノブイリ救援・中部」のお蔭でした。

私は、1987年2月に、汚染地域でなくヴィンヌイツャ州で生まれました。子どもの頃からチェルノブイリ原発事故についての話は、ほとんど聞きませんでした。大人になって、チェルノブイリ被災者の保障を利用して鉄道の切符を買う人を見た時、腹を立てました（この保障は、チェルノブイリ事故に関係ない人がよく賄賂で入手して使っていました）。その後、消防士や汚染地域の住民など、罪のない犠牲者と知り合って、彼らが大変気の毒になりました。この悲劇が彼らに起こってしまったからではなく、彼らが自分の問題によって他の人たちから引き離され、彼らの損なわれた人生・涙・悲しみに対して無関心な人々に取り囲まれてしまったからです（私もこのような無関心な人の一人でした）。

福島原発事故はチェルノブイリと類似した点も、違いもあると思います。類似した点は、日本の政治もウクライナと同様すべての真実を教えず、人々のことを気にかけていないことです。違いは、日本では被災者をサポートし、彼らに同情する人が多くいることです（ウクライナでは、被災者の問題は被災者自身と彼らの家族の問題であり続けるようです）。また、日本で危険な原子力エネルギーに対し抗議する人は増えていきます（ウクライナでは人々が原子力の危険を理解しているにもかかわらず、その開発は進められています）。



<3.11キャンドルアクションに参加>

福島県と福島原発事故に直接関係がない私の知り合いの日本人も、反原発デモに参加しています。反原発の人々の数はどんどん増えると信じています。この人々の目標は安全な世界と、それぞれの人の幸せな生活ですから。明るい目標が勝利しないはずはありません。隣人へのこの愛と配慮が、全世界と私のウクライナを満たすことを希望しています。 (オリガ・ヤスィノク)

## 「第2回 チェルノブイリ/フクシマ講座」開催

### チェルノブイリに 思いをはせた一日

2月3日、「チェルノブイリ/フクシマ講座 第2回『チェルノブイリから被災者支援を学ぶ』」を開催しました。「救援・中部」が行ってきた支援の数々、そして現地の被災者たちが自ら行っている支援活動などを、戸村京子さんに報告していただきました。参加者は18名と多くはありませんでしたが、被災地の現状、移住者たちのその後の話に、皆さん真剣に耳を傾けてくださいました。

事故より10年後に交わした手紙の朗読では、健康への心配、家族の悩みなど、原発事故ゆえの苦悩をつづった内容に、涙を浮かべている方もいらっしゃいました。朗読していた私自身も、チェルノブイリとフクシマが重なり、胸が詰まる思いでした。最後の意見交換では、チェルノブイリ被災者が受けている社会保障についてや、「チェルノブイリでは高線量の汚染地は村ごと消滅しているが、福島ではそれは不可能だ」というウクライナと日本の事情の違い、また「チェルノブイリの被害をマスコミは正しく伝えていない」という問題点も指摘されました。チェルノブイリ被災者が抱えた問題は、今後福島で必ず起きるであろうことの警告です。私たちはこれからももっともっと、チェルノブイリのことを伝えていかななくてはいけないのだと、とあらためて思いました。そして、心の支援や交流がとても重要だという思いを、参加者の皆さんと共有しました。

また「チェルノブイリ/フクシマ講座」に、宗教法人真如苑様より寄付金をいただくことになりました。この講座の最大の目標は、「フクシマを身近に感じてもらう」「風化させない」ことです。福島の方々をお招きして交流を図り、「フクシマファン」を増やしたいのです。

寄付金を交通費に当てさせていただくことで、講座の中身を深められます。ぜひとも講座に参加していただき、フクシマに私たちが何ができるのかを、いっしょに考えていきませんか。（市原 佳代）

### 第3回 チェルノブイリ/フクシマ講座 ご案内

日時：4月20日（土）午後1時30分～4時30分

場所：ウィルあいち 3F 会議室 7

内容：河田さんの「菜の花プロジェクト」最新情報



## 3.11 追悼 なくそう浜岡原発 東三河集会

昨年の3.11追悼集会&パレードに続いて、今年も3月10日（日）豊橋駅南口広場で、集会&パレード（デモとは言わない）が行われました。呼びかけ団体は、新城市の市民団体（昨年、なぜ声をかけてくれなかったと言われた）が加わって5団体、今年から賛同団体を募ったらなんと22団体。アースデーはら・食生活を考える母親の会・設楽ダム建設中止を求める会等、豊橋市・豊川市・田原市・新城市の東三河が結集しました。13時から、ステージでにぎやかに音楽（合唱・和太鼓・地元ミュージシャンのソロなど）をやりながら、会場周辺で署名活動や募金活動を行い、集会に移りました。

始めに「福島からの訴え」、いわき市から豊川市に避難している根本さん母子。お母さんはマザーテレサの言葉「愛の反対は憎しみではなく無関心」（「憎む対象ですらない無関心」とテレサは言ったそうです）を引用して、福島を忘れないでほしいと訴えられました。卒園式目前に避難してきた娘さんは、もうすぐ3年生。「もしここでまた地震がおきたら、大好きな友達とお別れしなければなりません。もう二度と避難はいやです。がんばれ日本！がんばれ東北！がんばれ福島！っていうけど、私はがんばってます。福島の友達に会いたいです。」その後、黙祷。賛同5団体のリレートーク、そして集会決議と中電宛の浜岡原発の永久停止・廃炉・日本から原発をなくす要望書が読み上げられ、パレードになりました。

中電豊橋営業所までの往復1.6km。パレードの真ん中でサウンドカーが音楽を流し、太鼓や笛、タンバリンなどにぎやかで、放射性廃棄物のドラム缶に扮装したり防護服を着たりもあり。今年は中日新聞にも載らなかったですが、福島を忘れない為に毎年続けていこうと皆思っています。（橋本 京子）

東日本大震災・原発事故後、2年が経過しました。残念ながら、復興への足掛かりは依然と遅く、いまだに約2,700名の行方不明者がいらっしゃいます。とりわけ福島は、除染作業の遅れが復興への足を引っ張っています。福島県は25年度予算で、年間1mSv以上地域40市町村分として、2,186億円の予算を計上しましたが、環境省直轄の警戒区域を除いた、地域全体の除染対象39万戸に対し1万戸(24年末)、福島市は9万戸に対し4%の除染しか実行されていません。南相馬市は329億円(当初予算の3分の1)を使い切れずに、2月議会で減額補正予算を組まざるを得なくなりました(ほぼ全額が除染費)。進まない最大の原因は、仮置場の未決定です。

24年末現在、除染特別地域(環境省管轄)の7町村(楢葉町・富岡町・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯館村)を除き、県内52市町村合計で、除染計画に基づく仮置場は126ヶ所(16市町村)、二本松市98ヶ所、その他の仮置場349ヶ所(30市町村)に過ぎません。住宅・学校・幼稚園・保育園・公園等の現場保管が4,811ヶ所(数字は福島民報より)と、惨憺たる状況です。また除染が進んだ福島市大波地区では、除染から数ヶ月後の現在、「数値が元に戻り除染効果がない」事を住民が指摘し始めています。「今後は、『除染後1mSv』という目標にこだわらずすすめていきたい」と、県自身が目標の見直しを述べ、環境省石原大臣も追従的発言をし、本格除染の前に白旗を上げている現状です。

3/22に葛尾村、3/25に富岡町、4/1に浪江町が「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」と3区域に再編されました。この様に、小出しにした地域再編による住民意識と補償の分断を繰返しながら、統治機能の強化を計ろうとしています。事故から、いまだに避難を強いられている「10km圏内」「飯館村」「帰還困難区域」の住民への、十分な補償と将来展望への道筋を提示する事こそが、いま政府に問われている施策ではないでしょうか。

新年度 南相馬市小中学校の入学予定者数が判明しました。(右表参照)

低学年児童を抱える原町区・小高区の家

庭、小高区中学生家庭の市外への避難が一目瞭然です。また、帰還をせず避難先で定着に傾きつつあることも予想されます。南相馬市人口(1月1日現在)は、震災前(約71,000名)から約▲6,500名減です。

福島県内外の多くの場所で、大資本・行政が一体となったメガソーラー計画が発表されています。確かに自然エネルギーの地産地消の側面を持っていますが、市民が自覚自立して行動・参加するという構造にはなっていません。

再生自然エネルギーの地産に向け活動してきた「えこえね」が、4月14日「一般社団法人えこえね南相馬研究機構」として設立法人化されます。現在の所は、農地を利用したソーラーシェアリングを中心として動いていますが、秋からは本格的にナタネ栽培を行い「菜の花プロジェクト」を発足させる準備も行われつつあります。

とどけ鳥事務所は、1.2.3月と検体数も少なく、3/28現在 累計2,830検体となりました。そろそろ、家庭菜園も葉物の収穫時期となります。4月早々にはチラシを準備し、市内全域に広報を行う予定です。

春の第5期南相馬放射線測定は、4/13原町区北部、4/14鹿島区、4/20原町区南部 4/21小高区と実施いたします。今回は、4/1に区域再編される浪江町(約224km<sup>2</sup>、約20,000人)の「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」2区域(約44km<sup>2</sup>約16,500人)の測定(4/13.14)を、とどけ鳥事務所として追加実施する予定です。その為に、同町内への立入許可書申請を行い準備中です。

行政区	校数	平成22年度	平成25年度	比率
鹿島区小学校	4	120	68	56.7%
原町区小学校	8	438	184	42.0%
小高区小学校	4	121	18	14.9%
全市内小学校	16	合計 679	合計 270	39.8%
鹿島区中学校	1	105	104	99.0%
原町区中学校	4	439	323	73.6%
小高区中学校	1	106	30	28.3%
全市内注学校	6	合計 650	合計 457	70.3%

注1 平成22年度 5月1日現在の在籍者数  
 注2 平成25年度 3月6日現在  
 注3 小高区の小中学校は鹿島区内のサテライト校で開校中  
 注4 あぶくま新報 3月15日号より

福島原発事故は、政府の安全宣言とは裏腹に、未だに終息の気配も見せず、日夜大量の冷却水注入が続いている。膨大な費用と被曝労働という負の遺産を、今後も数十年は続けなければならない。広大な面積の放射能汚染は、今後も国民の内部被曝の大きな要因となり続けるだろう。放射能汚染は、私達にこれまでとは違った世界をもたらし、生き方の変革を強いている。

### ゼロベクレルは不可能な世界

福島原発から放出された放射能は、セシウム換算で広島原爆の 168 発分になる。福島県を中心に北関東全域の大地が汚染され、農作物の汚染が起こっている。程度の差こそあれ、私たち日本人は汚染した野菜や魚などを摂取せざるを得ない状況に置かれている。ゼロベクレルを求める人々もいるが、それが不可能な世界に日本は突入したのである。

ちなみに 2012 年の福島産の米は、ほとんどが 25Bq/Kg 以下であり、政府の基準 100Bq/Kg を超えるものは 0.002% しかない。しかし、このことは逆に、25Bq/Kg 以下を我々は受け入れざるを得ないことを示している。多くの野菜や果物についても同様である。我々の食生活は、「フクシマ」以前と以後とは違った世界に入ったのである。

一方、このことが生産者と消費者との間に深い溝を作る原因となっている。「フクシマ」以前は目標だった「地産地消」が、今では「風評被害」に取って代わられている。実は、チェルノブイリ原発事故が起こる前、日本人は体内に平均 20Bq の放射性セシウムを保有していた。これは、過去の核実験による大地の汚染が原因であり、毎日 0.1~0.2Bq 程度のセシウムを摂取していたことを意味する。「フクシマ」によって、この値は大幅に増加するだろう。

### 内部被曝のリスクに関する論争

汚染食品を食べれば、当然内部被曝のリスクは高まる。政府は、内部被曝のリスクを外部被曝と同様、年間 1 ミリシーベルト以下にすべきだと言う。しかし、これは大きな問題を孕んでいる。何故なら、外部被曝と違って内部被曝は、直接測定できないからである。測定できるのは、体内に何 Bq のセシウムが存在するか、だけである。複雑な計算をもと

に、体内に保有するセシウムの Bq にある係数をかけてシーベルトに換算する。その結果によれば、セシウム 137 の 1 ミリシーベルトは、体内保有量が約 76,000Bq に相当する。

一方、ベラルーシで長い間被災者の健康診断や治療に当たった Y. バンダジェフスキーは、「シーベルトではなく、体重 Kg 当たりのセシウム濃度で健康状態を判断すべきだ」と主張している。彼によれば、体重 Kg 当たりの放射性セシウムが 50Bq を超えれば、心臓病や脳血管障害など様々な病気につながるという。体重 50Kg の大人なら 2,500Bq が限界である。これは、政府の主張するシーベルト主義とは全く相いれない。政府は、年間 1 ミリシーベルトを根拠に、食品基準を 100Bq/Kg に決めているのである。

### 毎日摂取量を 10Bq 以下に

ゼロベクレルが不可能な世界に生きる私たち。では、内部被曝のリスクを最小化するために、どれだけのセシウム摂取なら我慢できるのか。毎日 1Bq ずつセシウムを摂取した場合、次第に体内に蓄積されるが、飽和状態では大人の場合約 140Bq、乳幼児の場合は約 30Bq である。大人の体重を 50Kg、乳児の体重を 10Kg とすれば、どちらも Kg 当たり約 3Bq に相当する。このことから推算すれば、毎日 10Bq 摂取すれば Kg 当たり 30Bq が飽和量になる。様々な汚染食品が、複雑な流通を通じて日常生活に入り込んでくるが、毎日 10Bq 程度なら辛うじて守れるのではないか、というのが筆者の考えである。これを生産者と消費者が共通の目標として努力し、放射能による内部被曝を最小化すべきではないだろうか。勿論、こうした事態を招いた政府や電力会社の責任は、厳しく問われなければならない。政府の食品基準は、我々の健康を保障できない。(河田)

# 特集！ あれから2年(被災者の声)

## 「とどけ鳥」に 抱かれて

(玉川 雅子)

東日本大震災から、間もなく三度目の春が来る。二年前の三月、「電車もねえ。バスもねえ。車もそれ程走ってねえ。店はやってねえ。ガソリン、灯油は売ってねえ。」…そんな屋内避難区域南相馬市から避難して、東京で見た桜。賑わう街を道行く人々。往来激しいバスや電車。コンビニは、ますますの品数。

ファミレスで、豊富なメニューから悩ましく選ぶ。テレビをつけると、福島第一原発からの緊迫した映像と、一向に先が見えない危険な状態のニュースを他人事みたいに眺め、私達はまるで違う時代からタイムスリップしてきた様な脱力感。大通りに向かうと、制服姿の高校生達が大声で大震災の募金の呼びかけ。その真摯な姿に、涙が溢れて仕方がなかった。そんな記憶がまだ新しい。

この二年間はあっという間に過ぎたと思う。体は南だ西だと移動し、心は不安と恐怖、怒りいら立ち迷いを抱え、忙しさに流される日々。最近、ようやく後ろを振り返る時間を持つようになった。春は巣立ちの季節。新しい未来への旅立ち。原町区に住む友達は次々と仕事を再開し、疎遠になっていた友達も、自分の胸の内を淡々と語り出す。県外での避難を終え、自宅に戻る友人もいる。それぞれが転換期に来ている。さて、「とどけ鳥」で測定員として活動してから8か月が過ぎた。当初「放射能」にまったく無知だった私に、チェルノブイリ救護・中部の皆様の長年の活動・知見を、南相馬の地で授かる幸運。短期・長期・測定員に限らず、積極的に「とどけ鳥」の日常に関してくれる暖かいボランティアの方々。放射線量率マップの作成、クリスマスカードキャンペーン、福島復興・菜の花プロジェクト開始等、たくさんの手を、足を、被災地に寄り添う想いを絶え間なく届けてくれる皆様に、いつも励まされ背中を押してもらっている。「女があきらめたら世界は終わっちゃうんだよ！」大好きなTVドラマのセリフをつぶやきながら、今日も前進してゆく。



<カードを配りました。(右:玉川さん)>



<検出されませんように…(飯崎さん)>

## 「とどけ鳥」に たどり着く

(飯崎 健二)

3月11日、14時46分。私は、小高区の海岸沿いにある勤務先の化学会社で、今まで経験した事のない何度も繰り返す大きな揺れに襲われました。書架のファイル類が全て落ち、コピー機が電線を引きずって右に左に暴れまわりました。外を見ると、堅固なコンクリート道路も地割れがおこり、至る所で1mほどの段差の亀裂が入りました。揺れが収まって全員集合しても、海のそばなのに津波の心配は誰の口からも出ませんでした。その後襲ってきた津波で、低い部分の排水処理場は跡形もなくなりました。直径30cmもある鋼管が、飴の様に曲げられ、驚愕する光景でした。

それに追い打ちをかけるように、15kmほど離れた東電第1原発の爆発事故が起こりました。テレビの映像に驚き、家族4人で福島の妹宅に避難しました。この時は、避難が2年以上に及ぶとは思っていませんでした。偶然にも、会社の対策本部も福島市に避難して開設したので、通って各社員への物資の支援を行いました。避難先も長期戦になると思い、アパートを借りました。その年の6月に、会社も本拠地を仙台に移したので、今度は仙台のアパートを借りて、息子と2人で引っ越しました。娘と、家内と、我々2人の3重生活の始まりです。2人の男生活を心配して、仙台に毎週電車を乗り継いでやってくる家内に、「疲れているだろうに、すまないな」と思いました。その後、会社の縮小や定年退職の歳でもあり、会社を退職して家内のいる南相馬に戻りました。月並みですが「何が無くても家族が一番」という事です。ここで何かやれる事はないかと、ボランティア募集の案内で入ったのが、今の「放射能測定センター南相馬」の事務所でした。仙台でも、津波被害地の片付けのボランティアをしていました。誰とも会話のない避難生活は、気持ちがおかしくなると思ったのです。

目に見えない放射能は、測定しなければ何もわかりません。依頼者が、測定結果で安心されること。それが一番のやりがいです。もちろん、逆もたまにはありますが…。悔しい限りです。

## 「できるだけ遠くに…」「故郷・友だちを置き去りにして…」

愛知県では、544世帯・1,242人の人たちが、避難生活を余儀なくされています（2013.2.28現在。愛知県被災地域支援対策本部発表に依る）。そのうち7割以上が、福島県及び関東一円の放射能値の高い地域からの避難者ということです。福島県の避難地区に指定された地域、避難準備解除地区やそれ以外の自主避難の人たちです。愛知県被災者支援センター発行の『あおぞら』や『気持ちを手紙に』から、被災者は、家族での避難・母子避難、愛知県に実家がある人や知り合いが誰もいない場合など、避難の形態はさまざまということが窺われます。『気持ちを手紙に』には、それぞれの苦悩・迷い・決心などが綴られていて、これを読むと、私たちチェルノブイリ救援・中部がこれまで24年間支援してきた、チェルノブイリの被災者の姿と重なってきます。その一部を抜粋して引用させていただくと…

「地震・津波・原発の爆発と、今まで経験してこなかったことを経験しました。…何が起きているのかさえあまりわからず、着のみ着のままに福島を追い出されてこの愛知におります。この先何年放浪の旅に身を置くのでしょうか、自分の土地に根を下ろせない悔しさ、自分のログ（ハウス）で寝起きできない・食事ができないでいるむなしさ、自分の田畑から作物を収穫できない悲しさ…。また、「とにかく自分たちの子どもには健康に育ててほしいとの思いで、できるだけ遠くにと地元を離れてきた…」など、切々たる想いが打ち明けられています。同時に、故郷・友だちを置き去りにして避難してきた後ろめたさも、多くの人を感じています。避難できたことを幸運と感じ、前へ進もうとしている人もいます。それぞれの人の重い決断があり、私たちにとって決して人ごとではありません。「忘れないで」「現地を見て」という声は、チェルノブイリでもよく聞いた言葉であり、心に染みます。多くの人にこれらの声に耳を傾け、手に取ってもらいたいと思います。（戸村京子 記）



<福島 ふるさとの海>

## 「知り合いが少ない…」「色々な人と出会いたい…」

遠藤さん（39才）はいわき市に生まれ、現在、女の子（12才）と男の子（10才）と暮らしている。男の子は生まれつき心臓に病気があり、「精神薄弱」も併せ持っている。福島第一原発事故当時、遠藤さんは介護の仕事についており、お風呂・トイレ・食事などの訪問介護の仕事をしていた。事故当時、放射能の知識はなく、電気・水道などライフラインが途切れた。急いで子ども達を学校に迎えに行き、お姉さんの家に避難した。お姉さんの家には発電機があったので助かった。13日3号機が爆発し、避難した方が良いと言われ、東京の知人の家に2ヶ月間避難した。

東京で調べたところ、長野県松本市の雇用促進住宅に無料で入居できることを知り、8月に松本に引っ越した。上の子を小学校に入れ、下の子を養護学校に入れて生活を始めたが、松本の養護学校は人数が多く、通っているうちに子どもの顔色が悪くなったので、ストレスが大きいと感じ転居した。

木曾養護学校は、人数も少なくゆったりできそうだったので、木曾町の公営住宅に住むことにした。上の子は松本の学校で6年を終え、卒業までの間は木曾から松本まで車で送り迎えした。

基本的に自主避難の場合、東電からの賠償金は少ない。ただし、子ども2人に対してはこれまで一回目（2人で120万円）、二回目（2人で24万円）、大人1人（4万円）が出ている。現在、いわき市に戻れば住宅の用意は行政がすると言われているが、戻るつもりはない。

避難者の互助組織である、松本の「手をつなぐ3.11信州」の森永さんの助けもあり、4月から木曾町で以前と同じ介護の仕事で働けることになった。これからはカリカリせず生活したい。初めての土地から土地への移転続きで、その上、下の子の事情優先で避難生活を進めてきたので、上の子には負担をかけている。まだ知り合いが少ないので、色々な人と出会いたい。

\* 遠藤さんとは、この夏、伊那に福島の子供達を呼ぶ保養キャンプの打ち合わせ会でお会いしました。今回の急なインタビューにも、快く応じてくださった遠藤さんに感謝いたします。（原 富男 記）

## 2月ウクライナ訪問報告 長野県南箕輪村（原 富男）

2月5日から10日間、ウクライナを訪問しました。メンバーは、私と同じ長野県伊那の小牧さん、現地から通訳の竹内さんの3名でした。

毎年2月は、新年度の方針や予算を決めるため訪問するのですが、毎度のこととはいえ、仕掛かり中の仕事を早めに終わらせるなど、訪問は慌ただしいものです。



### 1. 菜の花プロジェクト規模拡大

菜の花プロジェクトの実験成功を受けて、ジトーミル州はナロジチ地区のナタネ栽培 500ha (5km<sup>2</sup>) の計画に対して、単年度で 20 万グリブナ (200 万円) の予算をつけました。しかしこの金額だけでは、播種機やコンバイン農薬噴霧器など、必要な機材が揃わないため、ナロジチ地区栽培組合は、日本外務省の草の根資金での援助を 12 月に再申請しました。ところが、同組合はこの制度や手続きに精通しておらず、日本大使館からの問い合わせの返事が遅れたこともありました。旧社会主義国のウクライナでは、日本の団体にみられる自主的積極的に物事を進めるといったスタイルが定着していないお国事情があり、私達は、大使館と密に連絡をとり積極的に説明に行くことを行政長に求めました。この結果、私達の滞在中に、ナロジチ地区行政長・農大ディードッフ氏・私達の三者が一緒に日本大使館を訪問し、改めて説明・要請をすることができました。

### 2. 事故処理作業支援

チェルノブイリ救援・中部は、これまで事故処理作業に従事し被災した「障害者3団体」に薬代などの支援をしてきました。新年度の支援額は、3 団体で年間 110 万円と額は少ないのですが、福島も抱えた今のチェル救としては、これが精一杯のところですよ。

これら事故処理作業者は、チェルノブイリ事故当時、住民の避難作業・土地や車の除染・原発内外の残骸処理・水処理などに従事して、被災しました。ウクライナでは現在、事故処理作業者に対する補償を減らす動きがあり、これに対する反対署名などにも取り組んでいるとのことでした。ウクライナの事故処理作業者の話を聞き、改めて福島事故処理作業者のこれからを見る思いがしました。

### 3. ナロジチ病院

ナロジチ病院には、これまで年間 85 万円程の医療機器・高額医薬品などの支援をしてきました。院長のマリヤ・バシユクさんは、地区の病気の状況について、成人に心臓血管系、児童に消化器系の病気があり、内部被曝が原因と考えているそうです。国からの病院予算中の医薬品項目が減少している理由は、今年度に公共料金とガス料金の値上げが予定されているため、そのシワ寄せが出ているとのこと。また、国からの予算が登録住民分しか出ず、診療を断るわけにはいかない無登録住民分も、赤字要因の一つとなっているとのことでした。

### 4. バイオディーゼル燃料製造装置 (BDF)、バイオガスの移管

菜の花プロジェクトの実験で使った装置類は、実験終了に伴い移管することとなりました。BDF は農大、バイオガス製造装置はカベツキー農場の所有となり管理されます。バイオガス装置は、1 月にはマイナス 20℃になったにもかかわらず、ガスが継続して発生しており、燃焼を確認できました。バイオガス担当者は、この数年でバイオガスの扱いに習熟しており安心しました。

### \*\*\* 訪問を終えて \*\*\*

訪問期間中、独協医大の木村真三さん達がナロジチ病院で行っている、内部被曝線量調査を見せていただきました。今回の調査対象者の中に、私達の友人である BDF 装置担当者も入っており、彼の内部被曝線量は 58,000 ベクレルでした。彼によれば、母親が毎日搾りたての牛乳を「体に良いから」といって持って来てくれるので「断りきれず」飲んでいるとのこと。毎年ナロジチ地区を訪れ慣れてはいるものの、改めて深刻な内部被曝を考えさせられました。



## ナロジチ住民の健康被害

(小牧 崇)

2月末、福島市で開かれた NPO 交流会に参加しました。農林業・地域おこし・環境など、さまざまな分野で支援活動を行っている方々のお話を直接伺うことができ、とても参考になりました。しかし、その中でちょっと気になる被ばく医療の専門家のお話もあったのです。

- 被曝ゼロリスクを目標としない。リスクの値ごろ感が大切。
- 低線量被ばくの健康リスクは大というのはデマ。 ● 内部被ばくによる発症例はない。

こうした発言の背後には、「チェルノブイリ原発事故後でも、小児甲状腺がん以外の健康被害は認められず、すぐに健康を害するとは考えにくい…N 長崎大名誉教授」「子どもの甲状腺がん…チェルノブイリでもこれ以外の癌は増えたというデータはない…N 東大准教授」とする医療専門家の「常識」が横行しています。

福島第一の事故から 2 年が過ぎました。政府は、除染等により 20mSv/h 以下となった地域に避難民を帰還させるべく、準備を進めています。これに関連した一昨年 11 月 21 日付記事「年 20mSv/h 未満なら本当に大丈夫？」の一部を紹介します。

【低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループで…木村真三獨協医科大准教授が、線引きを年間 5mSv/h 以下とするよう主張。チェルノブイリ原発のあるウクライナ政府が、年間 5mSv/h が妥当と指摘。長期にわたる内部被ばくが、ウクライナの子どもの赤血球数などに影響を与えている…といった研究成果を根拠に挙げた。】

この会の座長は、先ほど紹介した N 長崎大名誉教授。木村さんの奮闘むなしく 20mSv/h に決まったのは、皆さんご承知の通り。フクシマを考える上で、チェルノブイリ汚染地帯（ナロジチ）に暮らす人々の健康被害の実態をしっかりと把握し、きちんと伝えることが今後ますます大切になると思います。

2月中旬、ナロジチを久しぶりに訪問。日本同様、今年は雪が多く、車中から森の道を眺めると、映画「アレクセイと泉」を彷彿とさせる風景が続きます。3 時間かけてようやく着いたナロジチは、雪に埋もれていました。地区病院では、院長のマリヤさんが首を長くして待っていました。救援・中部が長年支援している病院です。事前に送られてきた資料によると、「地区住民約 1 万人に対して、過去数年にわたり年間外来加療者数が 8~9 万人」「入院加療者数が 2,500 人弱」「成人の疾患の約 6 割が心臓血管系」となっています。疾患の原因を問うと、「低線量被ばくの影響ではないか」とのこと。しばらく意見交換ののち、昨年の支援で購入した医療機器を見せていただきました。特にテレカルド（心電図送信装置）は、患者が遠方の専門病院に足を運ばなくても、専門医の判断を仰ぐことができるようになり、大変助かっているとのこと。他の機器もきちんと使っている様子が伺え、好感が持てました。

二日後、病院を再訪。同時期にナロジチ入りしている、前述の木村真三さんの調査を見学するためです。彼は、ナロジチの 5 家族について、既に全員の被ばく量と食品の汚染調査を積み重ねています。今回は、事故後に生まれた若者 100 名の被ばく量と食品汚染、さらに地域病院のカルテに記録された病歴を比較検討することで、日本の専門家の間では「無い」とされている、「事故後の低線量被ばくの影響」を検証したいと意気込んでいました。病院に到着すると、既に学生風の若者が十数名集まっています。少し遅れて、木村さんの調査チームが到着。病院の一室を借りて測定が始まりました。廊下で待つ間に調査票に記入。入室すると身長体重計で測定（木村さんが自ら担当）。ウクライナ製の椅子型ホールボディカウンターで 5 分間計測（ウクライナの若い専門家が担当）。終了後、持参したジャガイモやきのこのピン詰などを提出し、謝礼 100

グリヴナを受け取って帰宅という流れ。その結果は…木村さんによると、福島県二本松市の調査で最も高い人でも数百ベクレル。この日調べた 20 名余りのナロジチ住民の平均は 6,000 ベクレル。若者でも全員 1,000 ベクレルを超え、途中割り込むように入ってきた年配者の中には、5 万ベクレルを超える方もいました。

事故から既に四半世紀が過ぎているにもかかわらず、この異常な数値です。木村さんと連携を取り合いながら、私たちがナロジチでやるべきことはまだまだあるのではないかと、そんな思いを強く持ちました。



## 竹内さんの「日本」便り

前回の「ウクライナ便り」で、読者の皆さんにいったんおいとまを告げたばかりですが、思いがけず編集部から、18年半のウクライナ滞在を終えての帰国報告を書くよう依頼がありました。

私は3月11日に妻と帰国し（特別にその日を選んだわけではなく、たまたまそうになりました）、その後郷里の岡山市でアパートを探し、家具や電化製品を買い込み、昨日引っ越したばかりです。まだ片付いていない荷物の傍らでこれを書いています。日本で携帯電話やインターネットの契約をするのは初めてで、戸惑うこともいろいろとありました。ウクライナでは携帯電話の利用について契約など必要ありませんし、インターネット回線使用の契約手続きもごく簡単なものです。しかし日本では契約のタイプを決めるにあたって、あまりに多く複雑な選択肢があり、私などにはすみやかに理解できず、一見利用者に多様なサービスを提供しているかのような幻想を与えつつも、結果として親切とはいえないのではないかと感じてしまいます（電化製品そのものの機能が、やたらに多くわかりにくいと同様）。スーパーマーケットのポイントカード・システムや、セルフサービスの安い食堂チェーンの出現など、最近のウクライナで見られるのと同じような現象にも出会いますが、これは世界的傾向、あるいはアメリカで生まれたシステムが世界に光被している（？）のでしょうか。

18年半前の日本での生活と大きく違うところは、ウクライナ人の連れ合いと一緒にいることで、過去4度日本に来ている彼女にとっても、長期滞在の住民として、また職場を持つ者としての滞在では、いろいろと新しい発見があります。

新幹線の自由席というシステムは、彼女には理解しにくいもので、「これだけ高い特急料金を払っているのに、座席がなければ何時間も立っていなければいけないというのはどういうことか。どうして座席の数以上の切符を売るのか」と言われました（ウクライナでは、鈍行列車であってもすべて指定席なので、「何

時間も立っている人」はあり得ない）。

一方、今ではスカイプというものがあるので、妻は日本のアパートの内部（畳・ふすま・押入れ）や電化製品などを、ウクライナの母親や



<19年ぶりのお花見(横浜にて)>

カナダ在住のウクライナ人の友人に次々と見せて解説し、彼女らは興味津々でそれらの画像に見入っています。ちなみに、神戸あたりに住んでいるロシア人女性が、日本での生活をロシア語で詳細に綴っているブログもあるようで、日本の日常のこまごました事象は、このようにして世界各地に知れ渡りつつあるものと思われま。

中 勘助の「日記体随筆」を「今のブログみたいなものですね」と評した、京都在住のウクライナ人日本文学研究者がいましたが、英語や露語に訳されて有名な枕草子だの徒然草だのも、当時の日本人の生活を窺わせるブログのようなものかもしれませんね。

ところで、岡山市在住の私の旧友によれば、福島原発の事故後、東日本からある程度離れ、気候も温暖で地震等の天災も比較的少ない岡山に避難・移住している人も多いのだそうです。それらの人たちをサポートする主旨の集まりもあったとのこと。福島第1原発での冷却システムのトラブルについての報道も最近あり、現在、同原発でどのような作業がどのような状況で行われているのか、そこで作業している人たちの被曝はどうなっているのかがいつも気にかかっている私としては（ウクライナで元チェルノブイリ事故処理作業員の人たちに会うと、いつも聞かれるのがこのことです）、ますます懸念を募らせる出来事でした。上記旧友など、思いを同じくする岡山の人たちと語り合う機会ができればと願っています。（3月28日）

# クリスマスカードキャンペーン2012・最終報告

(兼松 真梨子)

今年のキャンペーンがスタートしたのが昨年10月のこと。ワールドコラボフェスタでの呼びかけや、学童保育への出前講座など、多くの方へ呼び掛けてまいりました。季節は変わり、すっかり春となりました。事務所近くの公園では桜の花が咲き誇り、春の訪れを教えてください。それと同時に、また今年も無事にキャンペーンが終りを迎えられることを嬉しく思います。2月下旬に、キャンペーンへご参加いただいたみなさまへ、最終報告とお礼をお送りすることができました。今年は、ウクライナへ約1,900通、そして福島へ約1,000通のカードや折り紙作品などを贈りました。現地の子供達や保育園の先生からのメッセージは、前号のポレーシェで紹介させていただきました。



カードキャンペーンは、設立当初から続く活動のひとつであり、ウクライナと日本の子供達をつなげてきたものです。2011年からは、福島・南相馬市の子供達へのカードキャンペーンも始まり、今年で2年目となりました。「継続した支援ありがたい、また来年も…」というお言葉もいただいております。

悲しみの淵に立たされた人々に寄り添う、心の支援であるカードキャンペーンは、子供からお年寄りまでどなたでも参加できる活動です。ウクライナとのカードの交流は20年以上にわたり、現地の子供達から、お礼のカードや文通のお手紙・絵画作品などが届くようになり、相互交流としても役立ってきました。



今年もつい先日、ウクライナから福島の子供達へと、手作りカードや絵(写真)などが届き、これらはとどけ鳥を通して子供達へお届けする予定です。これからも、皆様の支えによってこのキャンペーンを継続して参りたいと思います。今年のクリスマスの時期にもぜひ、お友達やご家族、職場の皆様などに声をかけていただき、ご参加いただけることを願っています!

☆今後も温かい個々の輪が広がることを期待して☆

## <福島原発事故から2年 忘れないワクシマ 戦争と平和の資料館>

名東区 ピースあいちにて(橋本 京子)

### I. 写真展 飯舘村 3月9日(土)~3月23日(土)

飯舘村の酪農家、長谷川健一さんが、事故が起きた3月から現在まで撮り続けた1万枚を超える写真の中から、破壊された生活、避難所生活の苦楽、事故後の海外の人々との交流、苦闘する除染活動、未来へ向かって進む村民の決意などを中心に、50点が展示されていました。日本一美しい村といわれた飯舘村は、高いレベルの放射能で汚染され、6,200人の村民は村を追われ避難生活を強いられて、現在もなおつらい生活を送っています。区長の長谷川さんの指示でいち早く避難する前田地区の住人、バスに乗り込む写真は、ブリパチと重なりました。ガランとした牛舎に、殺処分された牛の冥福を祈って立てられた卒塔婆、「原発さえなければ」と書いて酪農仲間がロープを首にかけ、干し草ロールの上から飛び降りて自死した現場、山の幸、たくさんのキノコの前に「自由に食べて下さい(毒入りキノコ)」と書かれた紙、「私は山下俊一のもルモットにはならない」と書いて送り返した県の健康管理調査票。ドイツ・ベルギー・韓国に招かれて、反原発集会で講演したりデモに参加する長谷川さん、復興農場ができていよいよ酪農が再開、北海道から送られた牛45頭を嬉しそうにトラックから降ろす息子たち。飯舘村の人々の深い悲しみと怒りが伝わって胸がつかまりました。

### II. 写真展 チェルノブイリ 3月26日(火)~3月30日(土)

29日(金)当番で11時~4時まででした。来場者は10人、年配の方が多い中、女子高校生が二人とても熱心に見てくれました。素敵な笑顔のナロジチの子供達達の生活(食べもの、病気)、チェルノブイリ事故で放射能が地球をめぐり、日本にも影響があったことなどを話し、帰りにポレーシェを渡しました。



## 事務局便り

東電福島第一原発事故から 2 年目を迎えた。折も折、「ピースあいち」で、飯舘村とチェルノブリ写真展が開催された。飯舘村で、酪農を生業としておられた長谷川さんの撮った 1 万枚のうち、50 枚の写真が展示された。その中のひとつ。飯舘村で酪農ができなくなる事に絶望し、自死された方が遺されたメッセージ「馬鹿につける薬なし 原発で手足ちぎられ 6/7 AM9:30 やる気力なくした 6/10 PM1:00」と黒板に書かれた写真があった。放射能によって生業の酪農を奪われ、筆舌に尽くしがたい苦悩と絶望の末、自ら命を断たれたのである。原発さえなければ…。私達が、彼を忘れる事は許されない。胸に刻み付けなければならない。

今も、15 万人超の方々が避難生活を余儀なくされている。福島県の原発関連死はすでに 789 人と報道は伝えている。何故、死ななければならなかったのか？ 否、何に殺されたのか？ (山盛)

### ☆ご寄附の報告☆

総額:464,656 円 (2月1日~3月25日)

今号よりご寄附の報告をさせていただくことになりました。

ご支援くださった皆様、ありがとうございました。

私たちの活動は、皆様のご寄附によって支えられています！

- ミルクキャンペーン .....9,000 円 ウクライナへ贈るミルク代に充てます。
  - 被災者支援(ウクライナ) ..26,000 円 ウクライナの被災者が使う医薬品代に。
  - 菜の花プロジェクト .....10,000 円 ウクライナの菜の花プロジェクトに。
  - 福島原発被災支援 .....21,656 円 福島での活動費やとどけ鳥の支援に。
  - 指定なし(一般寄付) .....324,000 円
  - 賛助会員費(議決権なし).....71,000 円
  - 正会員費(議決権あり).....3,000 円
- } 団体の活動費や運営費に充てられます。

### ☆支援者の声☆

「月 2 回署名活動しています。最近、関心のない人が増えている感があります。もっと放射能の怖さを知らしめないと…」(岐阜市)

「今もなお放射線の恐怖で苦しんでおられる方々のことを思うと、心が痛みます。少しですが、何かのお役に立てたらうれしいです。」(福山市)

## 編集後記

☆3.11 関連のイベントで買った、宮城県牡鹿半島の被災者お手製の刺し子のランチョンマット。縫いものをされているときは無心になれて心が安らぐのだそうです。モチーフの鯨が愛おしい。(佳)

☆「老獺(ロウカイ)」って耳慣れない言葉知ってた？ もしも言われたら深く自己反省と修行の日々ですよ。社会参加をする以上は意識して疎まれないようにしなくちゃね。いつか「年の功」と褒められたいな。内緒だけど「老獺」を知らなかったの。日本語は奥深いなあ勉強になりました。(美)

☆何が書かれているのか全く知らず、内容の変更も許されない。そんな 900 ページに及ぶ分厚い誓約書に、だまって署名する人間がいるのだろうか？ しかも、一旦条件をのんだら、絶対に逆戻りはできず(ラチェット規定)、民間の投資家が不当裁判で国家を支配する(ISD 条項)など、TPP は毒素で満ち満ちている。ペリー来航(日米和親条約)、第二次世界大戦敗北(サンフランシスコ条約)に続く、第三の開国(TPP 不平等条約)を絶対に許してはならない。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473